
 学会動静

1999 年度学会報告優秀賞・奨励賞の選考経過と授賞理由

佐藤 純一・川端 香男里

第1次審査で最終審査の対象にノミネートされたのは以下の6氏の発表であった(敬称略, 五十音順)。

臼山利信 高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

鴻野わか菜 イリヤ・カバコフ——〈記憶〉の物語

古賀義顕 現代ロシア語の成節音体系について

坂庭淳史 チュッチェフ『デニーシエヴァ・シリーズ』における合一の変奏

杉谷倫枝 ブルガーコフの戯曲『偽善者のカバラ』にみられる「芸術家の受難劇」

鳥山祐介 デルジャーヴィンにおける表象の様式

最終審査の結果、優秀賞は古賀氏に、奨励賞は坂庭氏に決したことは、すでに本年1月発行の会報第10号で全会員にお知らせしたとおりである。なお、今回の審査を担当したのは、青山太郎、諫早勇一、川端香男里、桑野隆、佐藤純一、丹辺文彦、沼野充義、服部文昭、望月哲男の9委員で、長野俊一委員は海外出張のため審査に加わらなかった。

さて、今回の言語学分野の発表は8編で、その対象は古ロシア語、18世紀ロシア語、現代ロシア語、ポーランド語、ラトヴィア語に及び、また、記述のレベルないし論考の領域は音声学、音韻論、統語論、語用論、対照研究などに分類されるが、臼山氏の発表はそのいずれにも属さないロシア語教育

の現状調査報告であった。これを他の発表と同列に扱うことについての疑問は審査の当初から存在したが、発表会場で高い関心を集めた事実と、発表そのものの完成度を評価する委員が多く、最終審査に含めることになった。なお、三谷氏(1989年度優秀賞)とロゴズナヤ氏は予め選考対象外となっていた。

最終審査では、まず、臼山報告の評価と取扱いについて議論があった。臼山報告は調査の規模と精度において優れ、多くの会員の関心を集めた事実は評価すべきだが、学問研究の成果とは言いがたく、性質が違いすぎるので今回の授賞の対象から除外するという結論となった。同氏は93年度に奨励賞を受賞し優れた研究者としての実績を認められているので、今回の報告についてはこの決定を了承されるよう希望する。

優秀賞の古賀氏の報告は、日本のロシア語研究史上特筆すべき業績と評価する。古賀氏は今回の報告で、ロシア語の母音体系の構造的解釈という音韻論の核心問題に正面から取り組み、定説の批判・再吟味の上に新しい独自の仮説の構築を試みたが、精密な観察と深い考察を反映した論証の過程は極めて明快で説得力があり、結論の主要点は近い将来ぜひ国際的な討論の場に提出されるべきものと思う。ロシア語をはじめ多くの言語で、音節初めの位置の母音が喉頭閉鎖を伴うことはよく知られた事実であるが、古賀氏はそれを[i]の解釈にも適

学会動静

用し喉頭閉鎖音素の硬・軟の対立を導入するアイデアによって、従来の解釈の多くの不整合性や矛盾を克服できることを指摘している。故服部四郎教授の音韻論研究の伝統に連なる日本の若い研究者のこの新しい提案は、世界の専門家の注目を集めるものと期待される。なお、M. B. Пановの著作への言及がないとの指摘が委員の一部にあった。結論に影響はなかったものと判断されるが、最終的な論述の中には含めるべきものと思うのでとくに付言する。

文学・文化分野の発表の対象は文学プロパーの領域から、宗教・芸術・思想・祝祭研究と幅広く、また200年祭にちなんでプーシキン関係の発表が5編あったことも印象に残った。ただ、いずれも周辺的問題を取り扱っていて、日本のプーシキン研究をさらに推し進めるようなレベルのものがなかったことは残念であった。

最終審査に残った4編は、どれも優劣のつけがたいすぐれた報告であった。いずれも、より大きな文化的思想的芸術的あるいは様式史的背景との関連をさぐりながら、作品の本質を明らかにしようとしているところに見るべき点があったように思う。鴻野氏の報告は、現在も活動を続けている前衛芸術家カバコフと真正面から取り組んでいて、かつて受賞したことのある報告者の資質の新たな側面を明らかにした点で注目すべき業績であった。杉谷氏のブルガーコフに関する報告は、『巨匠とマルガリータ』の巨匠を頂点とする、「受難者としての芸術家」タイプの形成の上で重要な意味をもつ作品として『偽善者のカバラ』を分析し、ルイ14世時代のモリエール、スターリン時代の芸術家との重ね合わせと、ブルガーコフの戯曲に導入された「ヴェルテブ」構造の重合性の連関を見事に解明している。

鳥山氏の報告は、デルジャーヴィンという18世紀ロシア文学の代表的作家に正攻法で取り組んだというところに第一の意味があるが、加えて時代様式と作品の関係という大きなテーマを扱ったというところに評価すべき第二の点がある。それも、網羅的図式に陥ることなしに、説得的な細部をいくつも提示してみせるという手法をとったことも報告のすぐれた点である。

前述したように、最終審査に残った4報告はいずれも評価すべき点の多いすぐれた業績であるが、言語学分野の古賀氏との兼ね合いで、審査委員会は4報告の内、坂庭氏の「チュッチェフ『デニーシエヴァ・シリーズ』における合一の変奏」を奨励賞の対象として選んだ。

日本におけるチュッチェフ研究はこれまでそれなりの成果を挙げてきているが、坂庭氏が今回論じた「デニーシエヴァ・シリーズ」は、一つの恋愛悲劇を深く心理的に洞察し解明した、哀切な恋愛詩群として、そしてつばらチュッチェフの個人史上の問題として考察されてきたように思われる。坂庭報告はシェリング思想とチュッチェフとの生涯にわたる深いつながりを軸に、「デニーシエヴァ・シリーズ」がチュッチェフの前期の詩作と後期の作品を結ぶキーポイントにある重要な作品群であることを強調している。トルストイを魅惑した自然との合一という前期の思想が、主人公とヒロインの「魂と魂の合一」へと発展し、さらにはヒロインを媒介とした人格神、キリスト、ソロヴィヨフ的ソフィアへの志向すらもうかがえるという展望が示唆されている。19世紀後半に顕著になったキリストやソフィアのイメージの活性化とチュッチェフとの接点が示された今回の報告は奨励賞に値すると考えられる。